連載ミニエッセイ 7

『砂の器』と亀嵩

２４期　徳田完二

何度も映画やテレビドラマになった松本清張の『砂の器』は、出雲弁が鍵になることから島根県出身者には思い入れのある人が少なくないだろう。私はそれと違った意味でこの作品に特別な思い入れがある。

私がいちばん好きな『砂の器』は 1974 年に公開された野村芳太郎監督の映画で、丹波哲郎、森田健作、加藤剛らが出演したものである。なぜその作品に特別な思いがあるのか。それには上記作品の中で緒方拳が演じた巡査が関わっている。三木謙一というその巡査（正確には元巡査）の他殺体が東京の蒲田駅で発見されるところから物語は始まるのだが、話が進むうち、三木謙一は奥出雲にある亀嵩の駐在所で巡査をしていたことが判明する。三木巡査は、ハンセン氏病の父親と一緒に全国を放浪した少年が亀嵩にいた時期に面倒を見ていた人、という設定だった。

ところで、私の父方叔父は手先が器用で、若いころ大工をしていたそうだが、なぜかそれをやめて警察官になった。隠岐の駐在所に勤務した後に転勤を命ぜられたのが亀嵩だった。

手先は器用だが人付き合いは不器用で、けっこうイケメンだったその叔父が私は好きだった。そして、野村芳太郎監督の『砂の器』を見た時、緒方拳扮する三木巡査が私の中で叔父と重なって見えた。と言っても、叔父の顔が緒形拳に似ていたわけではない。亀嵩にいた時代が映画とは全然違うものの、叔父があの場所で巡査をしていたのだと思うと感慨深かったのである。緒方拳の出雲弁は控えめに言っても上手でなかったように思うが、それは大目に見よう。映画を見てからというもの、私にとって「亀嵩」は特別な場所になった。そして、いつかそこに行ってみたいと思った。

就職してはじめに住んだのが広島だった。その時期、中学時代の友人から松江で結婚式を挙げるので出てほしいという連絡をもらった。もちろん出席すると返事し、妻子を伴って行くことにした。

広島から松江へ行くルートのどれを選ぼうかとあれこれ考えた末、心の隅に引っかかっていた「亀嵩」に行くまたとないチャンスだと思い、そこを通るルートで行くことにした。それは、広島駅から芸備線で備後落合へ行き、そこから木次線に入って、宍道駅から松江駅に至るものである。その途中には、急斜面を列車がスイッチバック方式で登る箇所があった記憶がある。今となってはもう詳細をほとんど覚えていないが、気になっていた亀嵩の駅は通過するだけだったので、あっという間に通り過ぎたように思う。駅のホームにあったはずの「亀嵩」という駅名表示も、見えたのかどうか心許ないほどだった気もする。しかし、ずっと気にかかっていた場所に来ることができたのが私には満足だった。松江からの帰りは伯備線と山陽新幹線を使ったので、亀嵩を通る線路を走ったのはあの時だけである。

『砂の器』とは、はかなく崩れるものの謂（いい）であろう。木次線の車窓から見た亀嵩駅も亀嵩の家並みも、かれこれ三十五年以上も経った今ではほとんど記憶から消えてしまった。しかし、映画『砂の器』の場面のいくつかは今でもありありと思い出せる。中でも、三木巡査が着ていた真っ白い制服の記憶は特に鮮やかに。

連載ミニエッセイ８

四十前の「足習い」

子どものころ私の田舎では冬にけっこう雪が積もったので、小学生の時は自分で作った竹スキーでよく遊んだ。

竹スキーを作るには、まず孟宗竹を適当な長さに切り、ナタで四つに割ってから節を削り取る。次いで、割った竹を二本一組にし、何カ所かにキリで穴をあけて針金でつなぐ。さらに長靴の先を差し込むため、針金の輪っかをつける。最後に、先端の少し手前を火であぶってから足で踏みながら曲げ、水につけて固める、というものだった。雪が積もると、男の子たちはほどよい傾斜がある山道に集まり、手足がかじかむまでスキーで滑った。

私は三十代半ばで札幌に移住した。それは上の娘が幼稚園年長組の時だった。そしてその後、冬の札幌では小学校の体育の屋外授業がもっぱらスキーだと知った。校庭が冬じゅう雪に覆われるため、ほかの競技ができないからである。スキー授業はブルドーザーで校庭に作った雪の小山で行うのだという（ちなみに、苫小牧や室蘭などでは雪が積もらないため、冬の体育は氷を張らせた校庭でスケートをするのだそうである。冬期における太平洋側気候と日本海側気候の違いが本州だけのことでないと知ったのは、北海道に移住してからだった）。

先の事情を知った私は、娘が小一の冬休みに彼女をスキー教室に通わせることにした。札幌市内にはいくつもスキー場があって、いろいろなスキー教室が開催されていた。

娘のスキー用具をそろえるのに合わせて、私も自分用を買った。当時は大きな団地（公務員宿舎）に住んでおり、棟と棟の間に小さな雪山があった。それは、除雪車が雪を道路の外に押しのけてできたものである。新品のスキーを手に入れた私はさっそく、人目につかない夜にそこで滑ってみることにした。子どものころ竹スキーで「ならした」身なので、それなりに自信を持っていた。

ところが――雪山の上でスキーを履いたとたんにスキーが暴走した。私のからだはたちまち後ろにひっくり返り、そのまま十メートル以上（だったような気がする）も滑ってからようやく止まった。夜で雪が凍っていたせいもあったが、それ以前に「本物のスキー」が竹スキーとはまったく違う「とてつもなく滑りのいい道具」だったからである。また、本物のスキーは両サイドについている金属製のエッジでブレーキをかけるのだが、竹スキーにはもちろんそんな

ものはない。そもそも両者は基本的構造からしてまったく別なしろものなのだった。
　さて。誰にも見られなかったとは言え、暗がりで醜態を演じた私は、すぐにスキーを脱ぐと、すごすご家に帰った。そして、小一の娘と一緒にスキー教室に入るべく、参加申し込みを決めたのだった。

　そのスキー教室は一グループが十人ちょっとだったと思う。小学校低学年の初心者向けの組に入れてもらったので、当然、大人は私一人だった。講師はアルバイトの学生二人で、まだ二十歳前の若造（？）だった。その組に入れてもらったのは、初めてスキーをする娘が心配だったからなのだが、レッスンが始まると娘の心配をするどころではなかった。スキーを「ハ」の字にして滑るボーゲンという基本形を身につけるのに苦労したし、体重移動のコツがなかなかつかめなかった。小学校一、二年の子どもたちは私よりずっと飲み込みが早いようで、何ともわが身が情けなかった。

　「本物のスキー」の滑り方がどうにか身についたと思えたのは、その次の冬、札幌市主催の大人向けスキー教室に参加した時だった。その時はじめて習った、両足を平行にするパラレルという滑走法が私には楽だったからである。パラレルはボーゲンよりも「竹スキー」の滑り方に近かった。おかげで、それ以後は毎年、北海道の冬を楽しむことができた。

　考えてみれば、もうずいぶん長いことスキーをしていない。北海道から京都に引っ越した時に送ったスキー用具一式は、一度も荷ほどきすることなく収納スペースで眠っている。